

優秀賞

## 季節外れのチョコレート

東京都 暁星中学校三年 石原 正隆

夏休みが終盤になろうとしていたある日の夕方。

「ピンポーン」と玄関のチャイムが鳴った。夕食の仕度をしていた母の代わりに僕が応対に出ると、そこには八十半ばのご近所のおばあさんが立っていた。

「あら、まあちゃんくんは。今日はまあちゃんとお父さんにお礼を言いたくて伺ったのよ。」

突然のことで困惑ぎみの僕におばあさんは言葉を続けた。

「一月の大雪の日に、近所中を雪かきしてくれたのは、まあちゃんとお父さんだったのね。おばあさん、今日になってそれを知ったの。これまでお礼を言えずごめんなさいね。」

そう聞いて今年の冬に父と近所の雪かきをしたことを思い出した。これまで雪が降った時には、家族で家の前の通りの雪かきをしていたのだが、ご近所に住んでいる方が高齢になるにつれ、最寄りの駅に

向かう道が雪かきされなくなってきた。そうした中、今年の一月、首都圏が大雪に見舞われ、家の周辺も二十センチ近くの積雪になった。家の前の通りを曲がってから、比較的車通りの多い道まではメートル近くあるが、父と僕のどちらからともなく今回はそこまで雪かきしようと言いだした。体力に自信のある僕達でも想像以上にはかどらず、結局深夜と早朝の二回に分けて作業することになり、その度に真冬だというのに汗だくになってしまったことを覚えている。

時間も時間だったので、父と僕が雪かきをしていたことをご近所の誰も知らないとはかり思っていたが、どこかで見ていた方がいらしたようだ。そして時間を経て、我が家にいらしたおばあさんの耳に入ったらしい。それにしても、八月になってわざわざお礼だなんて。おばあさんの行動力に脱帽だ。

「いつもお世話になってばかりなので、僕達のできることをしたままですから。」

と照れくささを隠すように、僕は少し大人びた言葉で返した。

「まあちゃん、とても立派になったわねえ。本当にありがとう。心から感謝しているわ。」

おばあさんは、僕が幼い頃から中三になった今でも、僕がおばあさんの家の前を通ると庭先から、「まあちゃん」と声をかける。ずっと僕のことを守ってくださっているのだ。感謝の気持ちを伝えなければいけないのは僕の方だというのに。

「お礼が言いたくて居ても立ってもいられなくなつたから、家にあつたものだけんど受け取ってね。」

こんなおばあさんからじゃ嬉しくないかしら。」

そう言いながら、おばあさんはチョコレートの小箱を僕に差し出した。そしてとまどいながら受け取つた僕がお礼を言い終わらないうちに「じゃあね」と手を挙げゆっくり帰っていった。僕は少し曲がったその背中に向かい

「ありがとうございました。」

ともう一度頭を下げた。

